設立趣旨書

現在日本における狩猟活動を眺めるに狩猟活動従事者の高齢化と狩猟対象の偏り、またその手法の限界を感じる事から、新たな手法による鳥獣捕獲に対しての参加者の増加を目指しつつ、我国での自然の現状とその接し方を広く世間に広報し得る存在を目標とし、この活動団体を発起するものである。

その新たな捕獲手法とは近代発展したアーチェリー・弓矢による捕獲である。

現状法整備の問題から、その活動対象は地方自治体によって害獣として指定された生物に対してのみの「害獣駆除・獣害防除」とする。

主に地方自治体からの害獣駆除依頼を本団体が受け、参加者が団体に加盟することで、その者を地方自治体からの依頼を受けた害獣捕獲者とする。

日本全国において獣害による一次産業の被害は甚大なものであり、それを捕獲するために従事する現在の手法では到底それを食い止める状況に無い。

本団体での活動によって、例えその何割かへの影響であっても、億を超える金額で発生している獣害被害への経済的な効果は高いものと推測する。

また本団体は各地における地域振興を狙い、捕獲鳥獣の皮革、肉等を使用した産業・食肉への流用による地場産業振興を率先して促すものである。

これらの製品を販売するとともに、日本の自然を広く各種メディアを使いグッズ販売なども用い広報することで地方の自然環境への関心を高め、歪みがちである自然と動物、そして人間との関係をどのように考え正していくかを啓蒙していく情報発信機関としても働く。

そして、弓という日本にも古来よりある道具に対しての根源的な役割を見つめ、スポーツとしても偏重している現在のアーチェリー・弓矢文化への認識を社会的に正す目的を持つ。

：競技アーチェリーへの支援

日本においては全日本アーチェリー連盟（以下全日ア連と称す）を頂点としたターゲットスポーツとしてのアーチェリー団体が存在するが、その選手育成にかかる経済的負担は極度に選手本人に頼った状態であり、海外派遣に於いてかかる選手への経済的ストレスは多大なものがある。

これら経済的な理由で活動困難となる有望選手への渡航活動助成金の設置。

また、全日ア連は国際的に世界アーチェリー連盟（以下WAと称す）加盟組織としてかかわってはいるが、その競技対象はWAが主催する競技に従うものがほとんどであるが為、それ以外に数多存在するアーチェリー種目への参加機会が乏しいのが現状である。

本団体はそうした種目以外の人気を集め得る種目の海外組織と連携し、そうした種目での国内振興・国際大会への関わりを目指す事で、よりアーチェリー文化の日本への定着を促すものである。

：プロ選手を生み出す環境を目指す。

現在の日本のアーチェリー種目参加者の能力は外国から見て、決して低い物ではない。

しかし日本国内ではそうしたアーチェリー競技者であっても所謂プロ契約として活動できる環境になく、有力な選手であっても本業を別にもち参加する状態にある。

本団体がこれをサポートするものでは無いが、害獣駆除を通じ日本での弓矢による「狩猟」の可能性をも模索し法改正を提言していく。

有力なアーチェリーメーカーの多くはアメリカを初めとする海外メーカーである。

アーチェリー産業がターゲットとする消費者は、ターゲット競技よりもボウハンティングに重きが置かれている。

日本においてプロ選手を作るには、これらアーチェリーメーカーの日本法人を生み出す環境が必要と考える為、その市場育成には狩猟文化を根付かせる事が必然となる。

元来我国に於けるアウトドアへの投資意欲は十分なものがあり、その市場規模は大きい。

狩猟への関心を高め、より自然との交わりを意識させ、法改正を求める社会的な誘導をもたらす事を目標とする。

：鳥獣捕獲に於ける弓矢の利点。

概して日本に於いては弓による狩猟は殺傷力の観点から能力不十分。との思い込みがある。

しかしそれは全くの事実誤認であり、ブロッドヘッドを利用した矢とコンパウンドボウでの殺傷力は必要十分な能力を持っている。

突貫能力ではビッグボアライフル弾とでは比較にならない高い能力を持つ。

また、ライフル等銃砲に比べその飛距離は遥かに短い。

その為、流れ弾による近辺への被害の発生確率は銃砲のそれに比べ遥かに低い物である。

そして弓での捕獲は銃器に比し短い射程と原則バイタルエリアを直視で狙う事が必要である為、グラスカーテン越しの無暗な行射は起こしにくく、毎年のように報告される山菜取り等で山に入る人間への誤射事故。といった現象も起こり難いと考えられる。

その命中精度もコンパウンドの習熟者は下手な競技ピストルに比べても高い命中精度を持つ。

：ボウフィッシングの存在。

近年無秩序なペット飼育魚類の放流によって河川環境においても甚大な生物学的汚染が広がっている。

その中では通常の捕獲も難しい魚種もあり、その巨体、硬い甲羅状の皮膚などから従来の捕獲では対応は難しい。

この点ボウフィッシングの突貫能力であれば比較的遠方から容易に貫き捕獲することが可能である。

このような水生生物であった場合、水をせき止め排水することで池のような地理的条件であれば根こそぎ外来種のみを排除することも可能であるが、河川ではそれも難しい。

その為、根強い継続的な影響手段が必要となる。

全国組織となったなら、こうした行為をスポーツレジャーと捉える認識により継続的な駆除が行えるであろう。

：安全基準と自然へのマナーの植え付け

現状においても、弓矢に関する法的な規制は日本に於いては狩猟を許可する国から見ても、意識が低い物と言える。

日本の場合は法制化を先に行うよりも、マナーとしての自己規制ルールがターゲット競技参加者等によって独自に植え付けられているが、その内容はいささか偏重したものもあり、根本的な危機意識や安全とは少々離れていると思える物もある。

弓矢の存在を社会に存在する道具として“忌非”するのではなく、当たり前に存在する道具だ。という前提を植え付け、安全に運用していく為の意識を社会的に正しく認識させる為の“現実的”なルールを決めるべきものだと考える。

必要であるなら現在自転車購入時に行われる自転車登録システム。この程度の登録システムの提言はすべきかもしれない。と本団体は考える。

安全意識教育・安全運用教育の最低限のマニュアル化を行い、それを徹底し、そうした道具を扱う者として運用者本人・それを取り巻く社会環境、それぞれの認識を正しい物に導く努力を行う。

当然入会時これを徹底し、それに従えない者は排除する。

また、これをして弓矢の存在とは何か。を、啓蒙するための発信活動を行う。

これら活動を目指すものとして本団体を設立するものである。